

# シンポジウム 「森林・林業の技術者に 期待される役割と課題」

時：6月12日（日）13時～16時30分（開場12時30分）

所：岐阜県立森林文化アカデミー・テクニカルセンター多目的研修室

（美濃市曾代88番地 梅山駅下車徒歩10分）

持続可能な社会を構築していく上で、  
鍵を握るのが再生可能な資源としての森林。

日本の森林をどうもっていくのか。林業の再生をどう進めていくのか。

森林・林業について山村の人々に希望と関心をどう持ち直してもらおうのか。

今、決定的に欠けているのが、担い手であり、技術者であり、その育成者です。

このシンポジウムでは、生態系サービスの高度発揮を軸に

森林・林業を統合的にとらえながら、

第一線で活躍する専門家や技術者の提言をふまえ、

担い手・技術者育成の方向を見出していきます。

## パネリスト

只木良也（名古屋大学名誉教授：国民森林会議会長）

藤森隆郎（前日本森林技術協会技術指導役：国民森林会議提言委員長）

水野雅夫（林業トレーナーズ協会代表 Woodsman Workshop 代表理事）

千井芳孝（林業トレーナーズ協会スタッフ 南紀森林組合作業班長）

コーディネーター 山田 純（国民森林会議）原島幹典（森林文化アカデミー）

## 付属プログラム ～林業の現場から学ぶ～

### ◆「飛騨市国府 木戸協進さんの山林を見る」

時：6月11日（土） 所：JR高山駅 午後1時集合

戦後造林でありながら、生態系に配慮した丁寧な管理をすることで、シカにやられず、生産性もある理想的な経営が実現できています。

### ◆「郡上市美並 古川林業の山林を見る」

時：6月12日（日） 所：県立森林文化アカデミー午前8時半集合

江戸時代から続く古川林業の山林は、多様な林相をもっています。

理に適った道作りを実施するなど持続可能な戦略を模索しています。

参加申し込み 国民森林会議事務局 03-3519-5981（松本）5/25 まで

費用：シンポのみ参加¥500 二日間フル参加¥7000（宿泊込）

## パネリスト プロフィール



**只木良也**

(名古屋大学名誉教授 国民森林会議会長)

「生態系サービス」という語は、昨年 10 月の生物多様性条約第 10 回締約国会議(COP10)のキーワードの一つ。多くの生物とそれを取り巻く環境からなる生態系の働きにより生み出されるあらゆる便益—物質資源も環境資源も文化資源も—を意味する。従来、木材生産機能と公益的機能と分けて考えられがちであったものを総括する。これらの働きは細分すれば 50 機能ほどにも達するが、そのほとんどのものは、森林本来の生命活動、すなわち光合成生産、生物の生育、合成分解を通じた物質の循環、土壌生成などに根差しており、一つの森林はいくつもの機能を兼ねる、とするのが私の持論。 国土森林率が先進国中最上位にあるわが国は、今後ますます重視される自然資源・環境問題を、完成された自然としての森林に軸足を置いて考え、行動することが出来る先進国随一の国。わが国の森林・林業技術者には、その担当者としての役割を期待したい。

### 略歴

1933 年京都市生れ。

1956 年京都大学卒業、1961 年京都大学大学院博士課程修了、農林省林業試験場勤務。

信州大学理学部教授、名古屋大学農学部教授を経て 1997 年定年退職。

2007 年までブレック研究所(環境コンサルタント)顧問。

現在、NPO 自然と緑・自然大学学長、長野県林業大学校講師

<受賞> 日本農学会賞、環境科学会功労賞、日本森林学会功績賞、日本生態学会功労賞。

<著書>「森の生態」「森の文化史」「森林環境科学」「ことわざの生態学」

「新版森と人間の文化史」(2010 年—最近著)など。

ホームページ 森林雑学研究室 <http://shinrinzatsugaku.web.fc2.com>



## 藤森隆郎

(前日本森林技術協会技術指導役・国民森林会議提言委員長)

林業技術は最も知的集約度の高い技術を必要とし、持続可能な循環型社会を支える基盤となるものである。製材用の丸太を生産する技術の原理は極めてシンプルである。それは太陽エネルギーを利用して、水、二酸化炭素、養分を原料にして生産される物質を、通直性と真円性が高く、樹冠長と樹冠下長のバランスの取れた個々の木に適正に配分していくことであり、その中心技術は間伐である。この原理は単純明快であるが、その実践は知的集約度の高いものである。そこには生物学的な見方が必要である。

間伐、択伐、主伐は伐出技術を必要とする。伐倒技術は集材工程を左右する。そこには生物学的、物理学的、(道や機械に関する)工学的、地質学的見方が必要である。択伐、主伐の伐採と更新は一体的であり、そこには生物学的見方が必要である。以上の作業技術全体を通してコストと経営の感覚が必要である。

エネルギーも原料もただの素材生産業で必要なのは、人件費と機械経費のみであり、これらの質をいかに高めるかが林業経営を左右する。機械の選択や合理的な使用は人材に左右される。したがって林業に必要なのは知的集約度の高さであり、現場作業技術者の質の高さである。これほど生き甲斐と誇りの持てる仕事はそうあるものではないことを自覚して、技術者が結束して経営改善に貢献し、社会的地位を高めていただきたい。それは持続可能な社会に不可欠なことである。

### 略歴

1963年京都大学農学部林学科卒業、農林省林業試験場(現:森林総合研究所)に入省。

森林の生態と造林に関する研究に従事。

1999年、森林環境部長を最後に同省を退職。その後本年3月まで(社)日本森林技術協会技術指導役として日本各地の林業地を訪ね森林管理技術の普及指導に尽力。

これまでに青山学院大学非常勤講師、

国連の持続可能な森林管理の基準・指標作成委員会の日本代表、  
気候変動枠組み条約政府間パネル(IPCC)の執筆委員などを歴任



## 水野雅夫

(林業トレーナーズ協会代表 Woodsman Workshop 代表理事)

林業の課題の一つに人材育成がある。林業における人材育成はまったく体系化されておらず、現場では今でも「見て覚えろ」が主流である。

林業現場は中山間地で生まれ育った技術者に支えられてきた。彼らは子供の頃から現場に入る機会があり、鉋も下刈り機も珍しいものではなかった。そんな環境で育った人たちが学校を出る頃には、林業がどんな仕事なのか、様々な作業の意味も理解していた。だから「見てる」だけで、「覚える」ことができたのだと思う。だが、20年ほど前から都市部で生まれ育った人たち、いわゆるIターンが林業に参入し始めた。彼らの日常にはチェーンソーはおろか、「山」すら存在しなかった。そんな新規参入組に対して相変わらず「見て覚えろ」が繰り返されている。問題は林業での間違いは重大災害に直結するリスクが高いことだ。

時代の変化をとらえないと、歪みが生じ、歪みは最も弱い所に集中する。林業における人材育成は喫緊の課題、最も有効な方法で指導に当たるべきだ。最も有効な方法は最少投資で最大効果を生み出すものだが、人により違う。それを理解し指導するのがトレーナーの役割、トレーナーを育てるのがトレーナーズトレーナーの役目である。

林業の人材育成は、指導内容の体系化、指導の言語化から始まり、トレーナーの育成、トレーナーズトレーナーの育成へとつながる。業界と行政に対して人材育成の必要性の周知を徹底しなければならない。それには、Iターン者が戸惑い、傷つき、乗り越えてきた経験を活かすことが有効であり、不可欠だと感じている。

### 略歴

1962年名古屋市生まれ。

1997年郡上市の林業家に弟子入り、民間事業体に3年弱在籍。

2001年 Woodsman Workshop 設立。

現場請負(主に造林)と、林業Iターン・ミーティング(ITM)などの研修会での講師を生業とする。

2009年まで10回のITMには、22都道府県からのべ550人以上が参加。

2006年～ 熊本県の依頼により講師養成研修を開始。

2007年～ 山仕事の研修会「林業・寺子屋プロジェクト」を開催。

6コース14メニューの研修会で未経験者から林業就業者まで幅広く対応。

2008年12名の林業関係者らと林業トレーナーズ協会(TaF)を設立。

トレーナー及びトレーナーズトレーナーとして活動し、林業における人材育成の在り方を模索。

岐阜県郡上市在住。

<著書>・DVD教材「林業現場の指導ポイントはここだ！」(全森連)/監修・出演・「山で働く人の本」(全林協)/共著・森林技術「林業のインタープリテーションを考える」(日林協)/寄稿・林業新知識「Woodsmanからの手紙」(全林協)/連載・現代林業「指導の現場を行く」(全林協)/連載・TBS「News23」、中京TV「呼吸する森」出演



## 千井 芳孝

〈南紀森林組合作業班長（間伐搬出班） 林業トレーナーズ協会スタッフ〉

「現場リーダーの必要性、人材育成」はよく耳にするが、果たして都道府県や事業体レベルで出来ているのだろうか。私の所属する事業体では人材育成どころか、まともなリーダーすら少ないのが現状。自身の金儲け、損得や楽を考えての作業内容が時々見られる。これでは事業体も山主もたまったものではない。その逆に、事業体の儲けを優先するあまり劣悪な環境を作業員に強いる事業体も多い。そんな中、昨年度から統括現場管理・現場管理の責任者研修が全国展開で始まった。都道府県や事業体には、研修にそぐわない人材を送り込んでくる所もあり、運営側や講師に混乱が生じたと聞く。今後は、研修目的に沿う形での人選、個々のレベルに合う研修プログラムの開発が必要である。受講者が、学んだことを所属事業体内だけでなく、地域のレベル向上などに活かしてもらえれば、現場作業員から現場技術者への転換が可能となり、組合職員や上司と対等な関係を構築していくきっかけにもなろうかと思う。そういった意味でも、今後は人材育成のできる技術者を育成する人材が、必要とされるのではないか。

### 略歴

1969 年生まれ。

大阪府堺市出身。

工場勤務、業務用空調機器メンテナンス会社を経て 2002 年緊急雇用事業にて和歌山県へ！ターン。

2003 年緑の雇用基本研修生。

2010 年林業就業者能力向上対策事業研修企画委員